

十九世紀初頭における桐生新町の住民構造

岩城卓二

The Population Structure in Kiryu-shimachi at the Beginning of the Nineteenth Century

- ① 桐生新町の住民構造概観
- ② 総戸数・総人口の増減による住民構造の変容
- ③ 家持・借地・借屋の流出入
- ④ 桐生新町の住民構造の特質

【論文要旨】

在郷町桐生新町を対象とした研究は戦前・戦後とかなりの量に及ぶが、同町の住民構造を分析した研究は意外に乏しい。そこで、本稿では、桐生新町が繁栄から停滞に向かうとされる十九世紀初頭の同町の住民構造について、主に宗門改帳を用いて検討する。

十九世紀初頭の桐生新町では、借屋の増加によって町が繁栄し、富裕な借屋もみられるようになる一方で、従来、町の中核を担ってきた家持には困窮する者もいた。これまでこの桐生新町の住民構造については、借家層が分厚く存在することが特徴とされてきたが、その内実は十分に分析されることなく、下層民と位置づけられてきた。また、家持・借地・借屋の総戸数の変動のみから住民構造が論じられる傾向があった。本稿はそうした従来の住民構造の捉え方を克服するために、家持・借地・借屋の人口動態、奉公人雇用、家族形態にも目を向け、とくに十九世紀初頭、桐生新町の繁栄をもたらすとされた借屋の特徵把握を試みた。その結果、総戸数・総人口が増加し、町

も繁栄する文化・文政年間、借屋は総戸数だけでなく、総人口においても五〇%以上を占めるに至り、総戸数・総人口も減少し、停滞へと向かう天保期においても、総人口に占める割合は文政期の水準が維持されていることが明らかとなった。そして、奉公人を雇用する借屋は文政期と変わらずに存在しており、家督相続によって親と同居する借屋も着実に増えている。また、借屋は十九世紀初頭を通じて激しく流出入を繰り返していた。五年以内で流出する者が借屋の半分近くを占めており、桐生新町が安住の地とならなかつたことが知られるが、一方で家持とともに職業仲間の一員となり、長く同町に根付く者もみられた。十九世紀初頭とは、流入後数年で再び流出するような経営基盤の脆弱な借屋と、桐生新町に根付き、家持を凌ぐような経済力を蓄える借屋の二極分解が顕著に進行する時期であり、借屋Ⅱ下層というような捉え方ができなくなる時期であったといえる。